

目 次

はしがき	v
序	vii

パースペクティブ

第1章 「関連性」とモダリティ	2
1.1. はじめに	2
1.2. 真偽性モダリティ	4
1.3. 発話様態モダリティ	6
1.4. 関連性モダリティ	7
1.5. まとめ	11

第I部 モダリティとイントネーション

第2章 「関連性」とイントネーション	14
2.1. はじめに	14
2.2. 発話における「関連性」の位置づけ	14
2.3. 「関連性モダリティ」とイントネーション	20
2.4. まとめ	27
第3章 プロファイル理論の再分析	28
3.1. はじめに	28
3.2. Profiles の個別の機能	29
3.2.1. Profile A	29
3.2.2. Profile B	30
3.2.3. Profile C	34
3.2.4. Profile AC	37
3.2.5. Profile CA および Profile C+Profile A	40

3.3. Profiles の相互の関係	42
3.3.1. Profile A と Profile B	42
3.3.2. Profile B と Profile C	44
3.4. メタファー的存在物としての音調形	46
3.5. まとめ	48
第4章 イントネーション理論の批判的考察	50
4.1. はじめに	50
4.2. 共有知識モデル	51
4.3. 知識・態度複合モデル	54
4.3.1. Ward and Hirschberg (1985) の枠組み	54
4.3.2. Pierrehumbert and Hirschberg (1990) の枠組み	57
4.4. 発話態度モデル	59
4.5. まとめ	61
第II部 モダリティと諸構文	
第5章 日本語の終助詞	64
5.1. はじめに	64
5.2. 先行理論の検討	64
5.2.1. 終助詞のモダリティにおける位置づけ	64
5.2.2. 終助詞の談話における位置づけ	67
5.3. 終助詞の関連性モダリティにおける位置づけ	70
5.4. まとめ	75
第6章 IT 分裂文・WH 分裂文・反転 WH 分裂文	76
6.1. はじめに	76
6.2. 先行理論の検討	77
6.2.1. Prince (1978)	77
6.2.2. Hedberg (1990)	80
6.2.3. Oberlander and Delin (1996)	82
6.3. 各種分裂文と関連性モダリティとの関わり	83
6.4. 各種分裂文のコンテキスト効果	86
6.5. まとめ	89

第7章 倒置	90
7.1. はじめに	90
7.2. 先行研究の問題点	91
7.2.1. Green (1980)	91
7.2.2. Prince (1986)	92
7.2.3. Birner (1994, 1995)	94
7.3. 倒置のコンテキスト効果	98
7.3.1. 発話内の制約	98
7.3.2. 発話間の制約	103
7.4. 前置との差異	105
7.5. まとめ	110
第8章 指示とパラグラフ	111
8.1. はじめに	111
8.2. パラグラフ境界標識としての FNP	111
8.2.1. 談話構造に基づく説明	111
8.2.2. 一貫性に基づく説明	113
8.2.3. 処理に基づく説明	114
8.2.4. 関連性に基づく説明	115
8.3. 局所的指示と全体的指示	116
8.4. 階層的単位としてのパラグラフ	123
8.5. まとめ	125
第9章 付加疑問文・付加的〈質問〉	127
9.1. 付加疑問文のモダリティ	127
9.1.1. はじめに	127
9.1.2. 〈主張〉成分の特性	128
9.1.3. 〈質問〉成分の特性	131
9.1.4. 関連性モダリティ	133
9.1.5. 非平叙文に伴う付加疑問	136
9.1.6. まとめ	138
9.2. 付加的〈質問〉のモダリティ	139
9.2.1. はじめに	139
9.2.2. 〈質問〉の特性	140
9.2.3. 付加語句に伴う〈質問〉のモダリティ	141
9.2.3.1. 自由付加疑問	141
9.2.3.2. 遂行的付加語句	142

9.2.3.3. 間接的に質問を表す付加語句	143
9.2.4. まとめ	145
〈参考資料〉同極付加疑問のデータ	145
第10章 エコー疑問文	149
10.1. はじめに	149
10.2. 関連性理論による先行研究の検討	150
10.2.1. Blakemore (1994)	150
10.2.2. Noh (1998)	151
10.2.3. Iwata (2003)	153
10.3. エコー疑問文の表意と含意: メタ表示の〈質問〉と関連性評価	156
10.4. エコー疑問文とメタ言語的否定との相違	160
10.5. まとめ	162
第11章 話法:「発話」の引用・「考え」の引用	163
11.1. 直接話法・間接話法	163
11.1.1. はじめに	163
11.1.2. 先行的観察の概観	164
11.1.3. 直接話法・間接話法の伝達動詞	167
11.1.3.1. 直接話法の伝達動詞	167
11.1.3.2. 間接話法の伝達動詞	170
11.1.4. 直接話法と間接話法の意味的非対称	172
11.1.5. 直接話法における文頭伝達節の機能と特性	174
11.1.6. まとめ	178
11.2. 「考え」の引用	178
11.2.1. はじめに	178
11.2.2. 伝達動詞	179
11.2.3. 引用と報告の乖離	180
11.2.4. 文頭伝達節の機能	183
11.2.5. 考えの引用と発話の引用の双方向的移行	187
11.2.6. まとめ	189
第12章 倒置感嘆文	190
12.1. はじめに	190
12.2. 倒置感嘆文と疑問文との関連性	191
12.3. 肯定倒置感嘆文と否定倒置感嘆文の差異	194
12.4. 倒置感嘆文と付加疑問文の対応	197

12.5.	倒置感嘆文とプロトタイプ感嘆文	199
12.6.	倒置感嘆文と修辭疑問文	204
12.7.	倒置感嘆文における NTE の位置づけ	208
12.7.1.	NTE と真偽性判断	208
12.7.2.	NTE と否定辭との関わり	212
12.7.3.	NTE の強意的役割	215
12.8.	まとめ	216

第 III 部 モダリティと情報構造

第 13 章	多重主題構造	220
13.1.	多重主題構造の事象	220
13.1.1.	はじめに	220
13.1.2.	日本語の多重主題構造	221
13.1.3.	英語の多重主題構造	223
13.1.4.	まとめ	231
13.2.	多重主題構造の規定	231
13.2.1.	はじめに	231
13.2.2.	主題に関する過去の提案の検討	232
13.2.2.1.	Halliday (1967/68, 1985) の問題点	232
13.2.2.2.	Firbas (1972, 1974) の問題点	234
13.2.3.	代案	235
13.2.4.	結論	243
第 14 章	情報価	244
14.1.	はじめに	244
14.2.	久野の「情報の重要度」の概念の検討	245
14.2.1.	省略に課される制約としての妥当性	245
14.2.1.1.	主題的副詞と焦点的副詞が関わる場合	245
14.2.1.2.	動詞句削除が関わる場合	247
14.2.1.3.	動詞句内の構成素の削除が関わる場合	249
14.2.2.	内在的問題	250
14.3.	代案	252
14.3.1.	情報価	252
14.3.2.	情報価と文アクセント	258
14.4.	まとめ	259

結 び	261
参考文献	267
索 引	279